

集合住宅における共有空間の形成手法と分析ツールの開発

共有空間	コモンズ	公営団地
集合住宅	所有	キーワード6

横浜国立大学	○乾久美子 1*
横浜国立大学	寺田真理子 1*
ベルリン工科大学	ライナー・ヘール 2**
横浜国立大学	連勇太郎 1*

研究の背景

都市空間の個人主義化・商業主義化が進む現代社会において、人と人の関係を育みコミュニティが創出される共有空間は失われつつある。今まで子供の遊び場や井戸端会議の場であった路地空間は、「道路」として管理の対象となり活用が制限されるようになった。社会的にもそれを支える共同体の意識も希薄になりつつある。また、利潤の最大化を目的に、多くの空間は空間に対する利用料を支払わなければアクセスできないようになってきている。

近代社会における行き過ぎた資本主義・個人主義の反省として、近年「コモンズ」に対する注目が高まってきている。コモンズは、私的なものでも公的なものでもなく、共同体によって自発的に運営管理される共有資源であり、ポスト資本主義社会を構想するうえで非常に重要な考え方であるとされている。本研究は、コモンズとしての「共有空間」に着目し、それを支える空間的・社会的枠組みに注目する。

研究の目的

本研究の目的は「共有空間」に着目することで、人口減少時代に対応した居住モデルを構想するためのフレームを提示することにある。ここで言う「共有空間」とは、住人が自発的に活用・管理し、コミュニケーションが生まれる空間を指し、前述したように公共により一方的に提供される市民広場や、集合住宅における廊下をはじめとした共用部とは異なる。本研究を通して、コモンズとしての共有空間の形成原理を集合住宅などの事例から抽出し、各事例を評価・分析するためのツールを開発する。最終的には、コミュニティを核とした住環境をつくっていく際に必要になる共有空間を考察・創造する際に必要となる思考のフレームワークを構築することを目指す。

研究の方法

本研究は、1960年代から70年代に建設された国内の3つの集合住宅の事例、およびそれに付随する共有空間を研究対象とする(表1)。対象とした共有空間はどれも特徴的な空間的構成を有しており、様々なアクティビティを生み出すポテンシャルを高く持っている。しかし、社会状況、人口動態、入居者の属性、周辺環境など、外部的要因の変化により、現在は十分に活用されていないなど、当初の役割や機能が変化していることを共通の課題として持つ。幾つかの分析ツールを通して、各事例のも

つ空間構成の特徴を可視化し整理した。またヒアリングや周辺環境の調査を実施し、空間のみならず、時代背景、住宅システム、利用者の視点、コミュニティに対する意識や周辺環境の変化までを含めた総合的な観点から、共有空間が有効に機能するために必要な視点や課題を整理した。また、社会学や住政策の専門家に対してヒアリングやインタビューを実施した。

対象	所在地	竣工年	概要
いちょう団地	神奈川県横浜市・大和市	1971年	多国籍化する巨大団地。コミュニティごとに点在する共有空間をリサーチ。
桐ヶ丘商店街	東京都北区	1964年	赤羽駅近くにある巨大団地桐ヶ丘団地内にある商店街。十字形の歩行空間が共有空間として機能している。
W共同ビル	埼玉県	1964年	戦後の闇市が商店街となり、商店街が3つの商店会に別れ、そのひとつが共同ビルとして建設された。

表1：研究対象とした共有空間

事例1：点在する共有空間からみるコミュニティの関係—いちょう団地

いちょう団地は1970年代から先駆的に移民の受け入れを行ってきた歴史を持ち、現在十カ国を超える国籍の人々が集まって暮らす神奈川県最大の公営団地である。いちょう団地には、異なる文化を持つ小さなコミュニティによる独自の共有空間が生まれ、団地の内外に点在している。いちょう団地を取り上げることで、多文化共生における観点から共有空間のあり方を考える。フィールドワークおよびヒアリングを通して、アイソメトリックやダイヤグラムを作成し、表2のように比較マトリックスをまとめた。いちょう団地における住民がそれぞれの価値観や文化に合わせて、心地よく過ごすことのできる場所を団地の内外で見出し、テーブルや椅子などの簡単に持ち運べる道具を持ち寄り独自の共有空間を形成していることがわかった。それらは各々の文化や習慣を反映し、個性豊かで、互いの衝突を避けるように適度な距離を保ちながら団地内外に散らばっている。異なる文化的背景を持つ日本人コミュニティと外国人コミュニティは、日常的な交流はなく、孤立し点在している。一方、いちょう祭に代表される各国の共同体の繋がりを生み出す役

割を持った共有空間も存在するがわかった。

事例2：共有空間と社会的変化の関係—桐ヶ丘団地

対象とした桐ヶ丘団地内にある桐ヶ丘商店街は、十字形の中庭を持つ商店街であり、近隣住人の共有空間として機能している。特徴的なのは、時代の変化と共に様々な使われ方をしてきたことである。研究ではヒアリングを通して、商店街の中庭がどのように使われていたのかを調査し、アイソメ図で各時代の使われ方を比較できるようにした。近年では高齢化や空室率の増加により衰退しつつあるが、空間の魅力などから新しいプレーヤーがテナントとして入居し、イベントなどを開催している例も見られる。

事例3：占有からみる共有空間—W 共同ビル

W 共同ビルは戦後の闇市を起源に持ち、商店会の住人たちの総意で組合を結成し 1964 年に建設された特徴的な建築形態をもつ埼玉県在住商混合ビルである。W 共同ビルの分析を通して、共有部に対して住人が行う占有や空間改変が共有空間を活性化していくうえで重要な行為であることがわかった。

成果と知見

本研究を通して、3つの点を検討した。 いちよう団地の例では、団地内に点在する共有空間の特性を観察することで、コミュニティ間の関係性を考察することができた。日常的にコミュニティ内の結束を高めるうえで共有

空間が重要な役割を果たしており、一方で祭などコミュニティ間の交流を目的に生まれる共有空間もあることがわかった。コミュニティ内の共有空間は自発的・自然発生的に生まれており、交流を促す共有空間は強いリーダーシップのもと計画的につくられていることも確認できた。桐ヶ丘商店街の事例では、公営団地が持つ入居条件など制度的な部分が、1980 年代からの利用を分析することで、共有空間の使われ方に影響を与えていることを明らかにした。公営団地など、集合住宅の計画の際には、建物配置や間取りの計画だけでなく、付随してコミュニティ形成を持続的に担保し、人の関係を育んでいくことが可能なソフトウェアのデザインが非常に重要であると言える。また、W 共同ビルの事例では、時代によって店舗と住居の利用区分が変化している経緯から、一般的な区分所有型のマンションと異なる建物の空間利用形態が生み出された理由を明らかにした。そのことにより共有部で起きている占有や外壁のカスタマイズなどの空間改変が認められ、共有空間を活性化していくうえで重要な行為であることを理解した。また、専門家からのヒアリングを通して、行政や地域に、空間やコミュニティに対してオーガナイズ、マネージメントできる人の存在の必要性や、ハウジングやドメスティケーションを再考していくことが求められていることがわかった。

	メインストリート	中学校の調理室	集会所	公園	団地のあぜ道	小学校グラウンド	
リソース	アイソメ						
	団地内外	団地内	団地内	団地外	団地外	団地外	
コミュニティ	ツール	屋台・ステージ・お神輿	持ち寄った食材	カラオケセット	机・トランプ	持ち寄り料理・お酒・ブルーシート・イス	
	企画主体	自治会長	自治会長	各団体	自然発生	自然発生	
	使い方	いちよう祭り・お神輿	多国籍料理交流会	カラオケ・誕生日会・葬式・こどもの習字教室	トランプ	BBQ、飲み会	サッカー
	人数	200-300人	80人	8-10人	5-8人	8-10人	15人
参加者	国籍	老若男女	日本人以外	日本人	中国	カンボジア・ラオス	
	年齢層	老若男女	老若男女	高齢者	50-60代	10-20代 若者	
プログラム	連絡手段	掲示板に掲示	掲示板に掲示	声掛け(カラオケ)	仲間内	連絡なし、自然発生	
	管理	自治会長	自治会長	自治会長(責任者明記の上申し出し)			
	日時/頻度	11月第一週/年一回(いちよう祭り) 2019	2005・2009年 5回開催 2019	週三回	毎週日曜日	毎週土曜・日曜日	放課後
	費用	無料	費用の半分は大和市が負担	無料(自治会費に含まれている)	無料	飲食代	無料
規範のルール	規範のルール				夕方6時には帰る。道ごとに使用する国が分かれる。	家の場所は明かさない。	
	課題	うるさがる人もいる	・日本人が参加していない ・会を継続できなかった。	・外国人にとって手続きが煩わしい ・使い方のマナーが悪く貸し出せない		・夜なども騒いでうるさい	

表2：いちよう団地に点在する共有空間をまとめた比較マトリックス

*所属1：都市イノベーション研究院

*Organization 1: Faculty of Urban Innovation

**所属2：ベルリン工科大学

***Organization 2: TU Berlin